

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34427

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770072

研究課題名(和文)ハンセン病患者・回復者による芸術文化活動の意味と芸術性

研究課題名(英文)Artistry and meaning of art and cultural activities by Hansen's disease patients and persons affected with leprosy.

研究代表者

金 貴粉(KIM, KWIBOON)

大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・研究員

研究者番号：20648711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ハンセン病療養所で終生隔離を余儀なくされた患者・回復者はいかなる目的において芸術文化活動を行い、そこにどのような意味を見い出していたのだろうか。

本研究は、これまで日本のハンセン病療養所で患者・回復者によって展開された絵画、書、陶芸、手芸を始めとする多様な芸術文化活動の意味とその芸術性について明らかにすることを目的とした。芸術文化活動に携わる入所者からのインタビュー調査ならびに作品、関連文献調査を行うことにより、所期の目的を達成した。

研究成果の概要(英文)：What purpose do those patients and persons affected with leprosy who were forced to lifelong isolation in Hansen's disease sanatorium, commit themselves into artistic and cultural activities? And wondering if they had found any meaning in there.

This study is intended to reveal the significance of various art and cultural activities, such as painting, calligraphy, ceramics, handicrafts, ever deployed by the patients and persons affected with leprosy in Japanese Hansen's disease sanatorium. Also by carrying out the interviews, as well as research work from people involved in art and cultural activities in those sanatoriums, achieved the original purpose.

研究分野：書道史、美術史

キーワード：芸術文化活動 ハンセン病

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ハンセン病患者・回復者による文化芸術活動は、「ハンセン病文学」という名称がつき、『ハンセン病文学全集』(皓星社)として社会一般に広く伝わる文芸作品群とは異なり、これまで患者・回復者による作品類については、国立ハンセン病資料館や各社会交流会館、各園で開催される文化祭などの発表の場を除き、広く伝えられる機会がほとんどなかった。療養所のある熊本県や青森県の公立美術館で展覧会や作品の収蔵が行われるようになったのは近年のことである。熊本市現代美術館では、菊池恵楓園にある絵画クラブ会員作品を中心とした展覧会を2002年、2003年、2005年、2007年、2010年、2015年にわたり開催し、回復者の作品を継続して紹介した。同じく2007年には、国立ハンセン病資料館においても「こころのつくろい - 隔離の中での創作活動 -」展として全国の入所者による作品約100点が公開され、療養所内における芸術文化活動の意味を問う展覧会となった。また、個人展も開催してきた。青森県の松丘保養園近隣にある国際芸術センター青森では回復者の絵画が収蔵され、作品としての価値も高く評価されるようになってきている。さらに瀬戸内国際芸術祭において、香川県にある大島青松園が会場の一つとなり、回復者の生活用具や作品が公開され、多くの来場者呼んだ。

しかし、一般の美術館、博物館での開催や研究成果はほとんどあげられておらず、いまだ広く彼らの芸術活動について周知されていないのが現状である。これまでの美術史研究でもほとんど取り上げられることはなかったこれらの芸術文化活動について深く考察することで、それまでの「芸術」の枠組みを越えて、新たな芸術性の地平を得られる点に本研究の本質的な意義がある。

学術論文に至っては、書の作品制作を行った山本暁雨に焦点をあて、その創作活動に迫った拙稿「山本暁雨の人と書」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第1号、2010年)を数えるのみである。この要因として、各園に残されている作品の多くは、すでに亡くなられた方によるものが多く、それらの作品にまつわる副次的な資料や情報がほとんど残されていないということがあげられる。全国のハンセン病療養所入所者の平均年齢が84歳である現在、芸術文化活動を行う入所者も年々減ってきているのが現状である。その点において患者・回復者の芸術文化活動について調査を行うことは、時間の問題でもあるといえる。

## 2. 研究の目的

(1) 長年療養所に隔離されてきた患者・回

復者はいわば限界状況の中で、何のために芸術文化活動を行ってきたのだろうか。またそれは個々人の生き方にどのような意味を持ったのか。ハンセン病患者・回復者による芸術文化活動やそれを生み出す行為の意味は、ともすれば単なる趣味や身体障害の機能回復としてのみの意味付けをされてしまう可能性がある。

本研究は、個々の作品を把握し、全体像を掴んだ上でその意味と芸術性を明らかにすることを目的とするため、下記の3点を明らかにすることを試みた。

現時点におけるハンセン病患者・回復者による芸術文化活動の歴史的経緯と実態を解明する。

これまでの芸術文化活動で生み出された作品の分析を行い、その内容を具体的に解明する。

上記2点の成果を踏まえ、患者・回復者による芸術文化活動の意味と芸術性の解明を行う。

## 3. 研究の方法

(1) ハンセン病療養所におけるハンセン病患者・回復者による芸術文化活動の歴史的経緯と実態を明らかにするため、現時点において全国のハンセン病療養所で芸術文化活動を行っている回復者の聞き取り調査を最初に実施する。高齢化が急激に進み緊急性が高いと判断されるからである。それと同時に各園機関誌等の文献調査を行う。

(2) インタビュー調査を行った当事者の方が制作した作品等をデジタルカメラで写真撮影を行い、記録化、実測を行う。

(3) ハンセン病患者・回復者による芸術文化活動で生み出された芸術性の解明を行うため、各分野の専門家より意見をうかがう。調査結果、専門的見地からの意見を参考に分析を行う。

## 4. 研究成果

(1) 平成25年度、平成26年度の調査では、松丘保養園、東北新生園、栗生楽泉園、多磨全生園、邑久光明園、長島愛生園、菊池恵楓園、星塚敬愛園、沖縄愛楽園において陶芸や絵画作品制作を行っている方々を中心にインタビュー調査や作品写真の記録化を行うことができた。それにより、陶芸については当初はリハビリの一環として始めたものであったが、その後、自身を表現するものとして昇華させていったことが明らかになった。また、絵画作品制作を行う方のインタビュー調査で、制作は内面にある苦痛を含めた自己と向き合う行為であると認識していることが明らかになった。

(2) 戦前の文化活動の性格については、文献調査結果から次のことが明らかになった。1907年、明治四十年法律第十一号「癩予防二閣スル件」が公布され、各地を放浪する患者の隔離が国の政策として開始された。放浪する患者たちの存在は、近代「文明国」としての日本にはふさわしくないとされたため、療養所は患者の「取締り」という性格が強く、「終生隔離」の場として一生をそこで終わらせることを目的にしていた。

そのような中で、入所者のための慰安や娯楽などは、どのように考えられていたのだろうか。1935年11月15日に栗生楽泉園で発行された『入園のすすめ』パンフレットを見ると、「娯楽・慰安・互助」という項目には信仰の自由があると同時に、芝居や映画、スポーツや絵画活動、盆栽、文芸など趣味も自由に楽しむことができるということがうたわれている。実際に最初の5療養所の一つである大阪の外島保養院（現在の邑久光明園）では、開設の年にいち早く収容患者の「慰藉」をはかるため、図書クラブ、演劇団、碁将棋会ならびに幼年者の教育を目的に「慰藉会」が結成されていたが、これら当時の文化活動は、療養所側による平穏な療養所運営のための慰撫という目的で行われていたという側面が強かったことが明らかになった。

(3) 日本との比較研究のために取り上げた中国や韓国におけるハンセン病療養所の文献調査、インタビュー調査の結果、日本とはハンセン病政策が異なっていたのにもかかわらず、当事者による芸術文化活動の意味が単に趣味にとどまらない、自己表現と苛酷な差別状況を生きぬくための自己実現の手段であることが考察できた。この点から、ハンセン病患者・回復者の経験は、国や地域を越えて、共通性があると明らかになった。

(4) 戦後、新薬の登場によりハンセン病は「治る」時代となった。ハンセン病療養所では、「雨後の筍のように」文化団体が結成された。慰められる時代から、自分たちでそれに代わるものを獲得していこうという活気に園内は溢れ、新たな時代の幕開けを意味した。入所者たちが自らの生き方を模索していこうとしていく中で多くの文化団体結成へと結実したのである。絵を描くための画材を始め、音楽を楽しむための楽器一つ買う事もままならないほどに経済的な余裕はなかったが、入所者たちは活動を続けた。

「長島美術会」の加川一郎には単に趣味の域にとどめるといふよりは、自身がより納得できるものをつくりたいという思いがあったという。さらに「どんなに貧しい生活でも、額の一つでも掛けようという気持ちになり得る事は、幸福な事である」という加川の言葉通り、彼らは殺伐とした療養所内で少しでも人間らしく生きようとした。さらに彼らの傍らによりそい、支え続けた職員の実存も忘れ

てはならない。終生隔離が強いられた療養所で、人として生きるためには衣食住とともに、精神面での支えは何より重要であったことが、「長島美術会」の調査から明らかになった。

(5) 最終年度はハンセン病患者・回復者による芸術文化活動の意味と芸術性を明らかにするため、これまで各療養所で文化活動を行っている入所者や関係者からインタビュー調査、文献調査をまとめた。その結果、当事者にとっての芸術文化活動は、単に趣味として捉えられるものではなく、隔離政策という閉塞し、限界状況におかれた場であっても生きる意味を見出そうとした手段の一つであったことが明らかになった。特に絵画活動については、「戦後ハンセン病療養所における文化活動とその意味 - 絵画活動を中心として - 」、「『アジア太平洋レビュー』12号、大阪経済法科大学、2015年としてその成果を公表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計3件)

金貴粉「戦後ハンセン病療養所における文化活動とその意味 - 絵画活動を中心として - 」、「『アジア太平洋レビュー』12号、大阪経済法科大学、2015年 査読有

金貴粉「中国ハンセン病回復者村を訪問して」、「『国立ハンセン病資料館研究紀要』第5号、2015年、p91 - p96、査読有

金貴粉「成瀬豊追悼展によせて」、「『甲田の裾』第84巻第3号、松丘保養園慰安会、2013年

#### 〔学会発表〕(計3件)

金貴粉「ハンセン病患者・回復者による芸術文化活動の実相とその意味」2016年5月21日、大阪経済大学アジア太平洋研究センター会議(於・大阪経済大学アジア太平洋研究センター)

金貴粉「在日朝鮮人韓国人ハンセン病患者同盟結成と年金問題」、2016年5月14日、ハンセン病市民学会【招待講演】(於・鹿児島県鹿屋市文化会館)

金貴粉「朝鮮美術展覧会における書部門廃止と書認識の変容」、2015年10月4日、書学書道史学会(於・國學院大學)

〔図書〕(計2件)

『この人たちに光を - 写真家趙根在が伝えた入所者の姿 - 』展示図録、国立ハンセン病資料館、2014年

『林志明作品展 - 中国ハンセン病回復者の書画活動 - 』展示図録、国立ハンセン病資料館、2014年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

金 貴粉 (KIM KWIBOON)

大阪経済大学・アジア太平洋研究センター

・ 研究員

研究者番号：20648711